

〈論 説〉

1628年と29年、二つのウィーン製パン組合規約

内 山 雅 淑

要旨：今から一世紀以上前に出版された、グスタフ・アンドレアス・レッセル (Gustav Andreas Ressel 1861～1933) の編著『ウィーン製パン組合史料集』(Das Archiv der Bäckergerossenschaft in Wien, Wien, 1913.) は、中近世におけるウィーン市の製パン業の実態を知ることができる基本的な文献史料である。本稿は、同書に収録された多方面からの史資料のうち、史料番号8番 (1628年8月7日付け規約) と同9番 (1629年9月7日付け規約) を試訳・比較し、そこから見えて来る1620年代末のウィーン市民社会の問題点の一端を垣間見ようとするものである。

結論から言うと、わずか一年余りの間に、相次いで発令された二つの規約の最大の相違点は、前者がウィーン市長ダーニエル・モーザー (Daniel Moser 1570～1639) による確認的内容であるのに対し、後者は皇帝フェルディナント2世 (Ferdinand II. 1578～1637、在位：1619～37) 自筆入りの勅令であり、前者ではあまり触れることがなかった訪問販売パン屋 (Störren / Störer) ¹ が、後者では五つの条項を当てるという正規の形式において、かなり厳しい規制対象とされていることである。この背景として、すでに皇帝との関係修復を果たしていた、ウィーン製パン組合のパトロンでもあった枢機卿メルヒオル・クレーズル (Melchior Klesl 1552～1630) の、製パン組合と皇帝との橋渡し役としての存在が浮かび上がって来る。筆者はここからさらに、クレーズルとモーザーの関係、更にウィーン製パン組合員たちの、クレーズルに対する心性をも含めた姿勢にも言及する。

Summary: An important documentary record to ascertain the true state of the bakers' activities in Vienna in the middle ages and early modern times, is the book named *The Archives of Baker's Association in Vienna* (Vienna, 1913) published by Gustav Andreas Ressel (1861 ~ 1933) more than a century ago. This paper, by translating and comparing the two articles — No. 8 (dated August 7, 1628) and No. 9 (dated September 7, 1629)— from the many kinds of historical materials carried in that book, gives us a glimpse of the problems of the citizen's social life in Vienna in the early 17th century.

To begin from the conclusion, the biggest difference between these two articles, issued only about one year apart, is that the former had its contents confirmed by the Major of Vienna, Daniel Moser (1570 ~ 1639), but the latter was an imperial order by Ferdinand II (1578 ~ 1637, reigned 1619 ~ 37) in his own hand. Bakers without their own store who delivered door-to-door (Störrer) are hardly mentioned in the former, but in the latter they were placed under greater restraints especially in five clauses. As the background to this, I suggest the involvement of Cardinal Melchior Klesl (1552 ~ 1630), the patron of the Bakers Association in Vienna, who restored relations with the Emperor and became the mediator between the Association and Ferdinand II. From this point I'll attempt to elucidate the relationship of Klesl and Moser, as well as the mentalité of the Association's members for Klesl.

(1) はじめに

規約は、慣習的な諸規範の集合であり、文字通り慣習として共同体の中で自生的に形成されてきたものもあれば、皇帝や市長、市参事会によって強制的に変更を加えられて来たものもある²。本稿が考察対象とする、17世紀初期のウィーン製パン組合规約は後者として典型的と言ってよいだろう。本稿では、グスタフ・アンドレアス・レッセル (Gustav Andreas

Ressel 1861～1933) が一世紀以上前にライフワークとして編集出版した『ウィーン製パン組合史料集』(Das Archiv der Bäckergenossenschaft in Wien, Wien, 1913.) 所収の、二つのウィーン製パン組合規約を取り上げる。ひとつは史料番号8番(1628年8月7日付け規約)³であり、本稿ではこれを史料Aと略記する。もうひとつは史料番号9番(1629年9月7日付け規約)⁴で、こちらは史料Bと表記する。史料Aおよび史料Bの、筆者による試訳は本稿末に掲載し、それぞれの規約の要点は、以下の表1と表2として対比的にまとめてみた。

表1：史料A(1628年8月7日付け規約)の概要

この規約の発令者：ウィーン市長ダーニエル・モーザー	
第1項	・外国人製パン職人・同見習いの、専用宿泊所以外での滞在の禁止。
第2項	・同上専用宿泊所での対人マナー。
第3項	・親方やその家族に対する配慮。組合への届出事項。
第4項	・専用宿泊所での時間厳守。
第5項	・専用宿泊所に滞在する製パン職人あるいは同見習いの働く意欲。
第6項	・外国人の職人あるいは見習いが専用宿泊所で病気に罹った場合。
第7項	・専用宿泊所でのパーティーの開催とその費用と扶助。
第8項	・手助け求めるパン屋に対する一定期間での緊急支援の義務付け。
第9項	・訪問販売パン屋での、製パン見習いの労働の禁止。
第10項	・無知ゆえ訪問販売パン屋の所で働く製パン見習いは即離脱すべし。
第11項	・製パン職人もしくは同見習いの遅刻の厳禁。
第12項	・若い製パン職人たちの、親方等への無許可外出の禁止。
第13項	・パン屋店内での無駄使いの戒め。
第14項	・製パン見習いの、自らの懐に取り込むことの禁止。
第15項	・製パン見習いの親方への口答えの禁止。欠陥商品ゼロへの努力。
第16項	・製パン見習いへの懲罰の禁止。違反者の公的機関への告発と処分。
第17項	・製パン職人・同見習いの、仕事内容への悪口雑言等の厳禁。
第18項	・慣例の、製パン見習いの8日間の遍歴について。
第19項	・製パン職人および同見習いへの課金の、組合寄合通しの一本化。
第20項	・製パン見習いの、刑法に触れるいざこざがあった場合の対処。
第21項	・製パン見習いの、規約順守、感謝とリスペクトの心得。
第22項	・組合寄合での告発事項に関して、傍聴者の態度と違反者への処罰。
第23項	・製パン同見習いの、年四回の斎日での礼拝出席と献金の義務。
第24項	・死亡した製パン職人もしくは同見習いの遺体の埋葬について。
第25項	・復活節の翌日に音楽付きで王宮まで行進でのマナー。

第26項	・裁決の結果を受けて、即刻の弁済あるべし。
第27項	・週二度、専用宿泊所での調査と報告、台帳記載。
第28項	・製パン見習いの、登録時、組合台帳への記載料の支払い義務。
第29項	・ある製パン見習いが死去した場合の、葬送と埋葬の補助。
第30項	・製パン親方、同職人、同補助者の規約遵守義務。

表2：史料 B（1629年9月7日付け規約）の概要

この規約の発令者：皇帝フェルディナント2世自身	
第1項	・見習い期間修了の者は、共通の修業証書を持つこと。
第2項	・来訪の製パン職人・同見習いの、専門宿泊所での対人マナー。
第3項	・無一文でやって来た製パン職人もしくは同見習いへの対処。
第4項	・製パン職人・同見習いの、他からのオファーがあった場合。
第5項	・同上の製パン職人・同見習いの、製パン宣誓親方の職場での遅刻。
第6項	・製パン職人・同見習いの贅沢パン取り込み行為の禁止。横領罪。
第7項	・製パン職人・同見習いの、製パン宣誓親方との仕事上での心がけ。
第8項	・製パン職人・同見習いの、仕事内容による忌避の禁止。
第9項	・製パン職人・同見習いの罰金について。
第10項	・製パン職人・同見習いの係争関わりと示談行為の禁止。
第11項	・店内で大暴れをした製パン職人もしくは同見習いについて。
第12項	・如何なる製パン職人・同見習いの、製パン宣誓親方への受け入れ。
第13項	・製粉業者や、製パン組合で未受講の者の、規約遵守のこと。
第14項	・復活祭後の、慣行の第二日曜日での乱行に対する弁償義務。
第15項	・訪問販売者の、他のパン屋への営業妨害等の禁止。
第16項	・ウィーン市内では、地方のパン屋は、王宮でのみパンの焼成可。
第17項	・訪問販売パン屋の一掃。
第18項	・訪問販売パン屋や遍歴職人のパンの販売は、逮捕の条件となる。
第19項	・訪問販売パン屋の活動地域の限定と違反者への対処。

(2) 史料 A と史料 B の最大の相違点

わずか一年余で相次いで発令された、これらの二つの規約ではあるが、その内容を精査すると、極めて大きな差異が浮かび上がってくる。史料Aは、ウィーン市長ダーニエール・モーザー⁵(Daniel Moser 1570～1639)名による、従来からの規約の再確認的な色合いが濃く、(おそらくは)同市参事会書記の手になる簡潔な表現と考えられる。これに対して史料Bは、皇帝フェ

ルディナント2世（Ferdinand II . 1578～1637、在位：1619～37）自筆入りの勅令であり、帝国書記官の手による、重厚な表現によるものである。以上を踏まえて、史料Aと史料Bの内容上の最大相違点は、史料Bの冒頭部に表記されているように、「第15項、第16項、第17項、第18項および第19項が堅守され、広げられ、改善されんこと⁶」とわざわざ特記がなされていることである。この五項目に記されている主要な諸点は、訪問販売予定のパン屋の、他のパン屋への営業妨害、金銭授受等パン屋の代行業務の禁止（第15項）、地方のパン屋の王宮以外での製パン焼成の禁止、週市での時間遵守の監視（第16項）、訪問販売パン屋の一掃（第17項）、市内外諸所における訪問販売パン屋や遍歴パン職人のパンの販売は逮捕の条件となる（第18項）、訪問販売を実施しているパン屋の滞在場所の指定（第19項）等である。もちろん、史料Aにも、訪問販売パン屋での、製パン見習いの活動を禁じてはいるが（第9、10項）、訪問販売パン屋への圧力は全く感じられない。

（3）史料Bとクレーズルの役割

レッセルの先行研究によると、1614年の組合規約への新しい3項目の追加に際し、（すべて、組合内の不埒者（Störrer / Störer）に係る）、翌1615年、組合は、経費2フローリン6ソリドゥス相当の二種類の贅沢パン⁷を贈って、当時皇帝マティーアス（Matthias 1557～1619、在位：1612～19）の政治顧問であったクレーズルの口利きに謝辞を述べている⁸。しかし、その後のオーストリア大公フェルディナント（後の皇帝フェルディナント2世）によるクレーズルの逮捕⁹・幽閉・追放（1618～28年）のさなか、1622年に製パン組合は皇帝フェルディナント2世に対し、特に訪問販売パン屋に対する更なる新たな観点からの規制を求める規約の請願を試みた。これに、皇帝自身は前向きであったが、政府と議会が、「そうしたことは日常茶飯事であり、（規約を更新することは）新たな混乱を作り出すもの¹⁰」として

反対し、請願は最終的に却下された。これに対し、クレーズルのウィーン帰還（1628年1月25日）後、ウィーン製パン組合は、渡りに船とばかりに、再度の規約改正の請願を、クレーズルを通して¹¹皇帝に対して行った。すでに皇帝との関係修復を果たしていた枢機卿クレーズル¹²の仲介を得て、上記の五項目を加えた史料Bが皇帝フェルディナントの自筆入りで、勅令として発布されたのである。ウィーン製パン組合は、この度は、経費1フロリン4ソリドゥスに相当する贅沢パン1個を、またウィーン周辺地域の製パン組合も、3フロリン4ソリドゥス相当の贅沢パン1個を、規約改正にあたって¹³、クレーズルに贈った。

（4）まとめ

史料の翻訳と解釈を試みた者として、文書の性格について見解を言い添えたい。史料Aを発令した市長モーザーの意図は、ウィーン帰還後の、対抗宗教改革の先導者という意味でも敬愛するクレーズルに、その逮捕・幽閉・追放の空白の十年間のウィーン製パン組合規約の現状を改めて示したものではなかったのか。この両者の協議事実を基にして、ウィーン製パン組合は、再度クレーズルを介して、史料Bが示す、皇帝フェルディナント2世による新たな勅令発給を勝ち得たと思われる。ウィーンのパン屋の息子として生まれ、枢機卿にまで上りつめた人物が、辛苦を嘗めた後、再び故郷ウィーンに帰り、自分たちの要望までを適えてくれた。そのクレーズルに対し、仲間意識と尊敬、さらに感謝の熱い心情¹⁴が、ウィーン製パン組合に加入する全パン屋の心中に沸いたのではないか。筆者はこのウィーン市民の心情仮説をも組み込みつつ博士論文を仕上げたいと考えている。

史料 A：ウィーン市製パン組合規則（1628年8月7日付け）試訳

1628年8月7日

ローマ皇帝陛下の顧問官にして、市参事会員、かつ市長であるダーニエール・モーザー、ウィーン市参事会に文書で明らかにせし、自らの都市のパン屋に指示を行はせしこと。ある時点まで（パン屋の）作業場で発生せし混乱や不都合を悉く取り除くべく・・・これまで適用されることなく、以後はその効力のもとにあるべき以下の規約と条項とに従ひて、決定、決然と為されたる也。・・・願わくば、これらが周知され、（約款の）増減あるも、・・・請願に従ひ、「市長並びに市参事会規約」が批准され、今後ともに、状況に応じて、（約款の）作成作業が続けられんことを・・・委細以下の如し。

第1項 当地ウィーンに來たりし、異国の製パン職人もしくは同見習ひの者、（定められし）専用宿泊所にのみ滞在するべし。これまでの如く他所あるいは市壁外に身を寄せること、あるべからず。

第2項 上記同人らは、専用宿泊所にては慎み深くあるを旨とすべし。宿泊所にては（他人より）挨拶の無理強い、あるいは詮索為すことなく相接すべし。

第3項 上記同人ら、己れが両親の名を故郷で呼ぶと同じく、親方あるいはその家族の洗礼名ならびに姓名を呼ぶべし。また、上記同人ら、古参職人あるいは（親方の）指示受けたる者より（製パンの）手作業教示受くる場所（組合に）届け出ず可し。この件、日曜日ごとに記帳あるべし。

第4項 専用宿泊所にて休息取らんとする者、慎み深く、時間に誠実たるべし。・・・冬は、（午後）8時、夏は（午後）9時の門限なり。（これ以

降の刻限とならば) おとなしく休息致すこと肝要なり。・・・門限破りたる輩には、門戸を叩きて開門を乞ふこと、激したると控え目たるとを問はず、宿主情け掛くるに及ばず。これら輩には、隣人より非難あるも尤もなり。

第5項 総て製パン職人あるいは同見習ひ、週内に専用宿泊所に到来せし折、次週の日曜日に到るまで長々と・・・居続けることあるべからず。件の者、働き致さず、若しくは働く意思なき時、親方その者を解雇すべし。尤も、件の者、宿泊所自費にて賄ひ為すことあらば勝手許すべし。

第6項 異国出身の製パン職人あるいは同見習ひの者、専用宿泊所で罹病の事あらば、危なき病ひもしくは悪性ならざれば、親方、その者を能ふ限り長期にわたりて懇に扱ひ、宿泊所に逗留させるべし。後日、組合書記を通して、(病気の) 概要を(ウィーン) 市民病院に報告なすべし。

第7項 宿泊所にて宴催すに当たり、2～3プフニツヒにてはすまず、1クロイツアー(4プフニツヒ)を越ゆる支払ひとなるに於いては次週の日曜日まで滞在する貧しき者のため、製パン職人もしくは同見習ひの若者ら出席者互ひに合力し、宿主に宴の支払ひなすべし。

第8項 貧富老若を問はず、パン屋なる者、専用寄宿舍に來たりて、製パン職人もしくは同助手に手伝ひあるいは労働求むる折、件のパン屋がため働くこと期し得ねば、即座に、同人(製パン職人もしくは同助手)、そがパン屋の下にて、数日もしくは数時間、代わりて働くこと義務付くるべし。

第9項 以下のことがら、断念致すべき也。訪問販売パン屋・・・専用宿泊所に立ち寄りて、製パン見習ひとして働かんと欲せば、当該の見習ひ、たとえ以前よりそがパン屋と顔見知りたると否とにかかはらず、訪問販売

のパン屋営業中なるや、いずこに住ひし居たるか肝要なり。製パン見習ひの者、己れに声をかけし者、訪問販売パン屋にてあらば、そこにて働くことを控へるべく心得あるべし。

第10項 製パン見習ひの者、不慮にて訪問販売パン屋にて働きたることあらば、即刻、そこより立ち去るべし。

第11項 製パン職人もしくは同見習ひの者、正しき刻限に出勤すべし。

第12項 年若なる製パン見習ひの者、また同輩ら、己れ働きたる工房の親方若しくは女将に無断にて外出致すべからず。

第13項 パン工房にては遊戯致すこと厳に禁ず。

第14項 製パン見習ひの者らに対し、・・・次のこと禁ず。・・・焼き上げたパン懐中すること。試食の折も、己れの手元に取り置くことなかるべし。

第15項 製パン親方と協働しいたる製パン見習ひ、口答え・・・あるべからず。(製パン見習ひの者) 製パン職人の働き別して成し遂げること心すべし。これ念慮の上、助手として万事注意払ひ、いかなる欠陥製品も出さぬやう心掛くべし。

第16項 今日まで製パン現場にて働き来たる製パン見習ひに対し、懲罰致なすこと禁ず。この規約に違反せし者、また組合の慣しに背きし者あらば、公の組合寄合に告発し、仕置きなすべし。

第17項 製パン職人あるいは同見習ひの者には、焼成物運ぶこと任

さるることあらば、木、水、穀物、粉の運搬となるも、（それらの仕事に）悪口構へ、いずれかの仕事拒むは、以ての外なり。

第18項 製パン親方と同見習ひの者との間にて今日まで慣例たる8日間の遍歴期間に付き、（そのための）支度金受け取りには、14日先延しあるべし。

第19項 製パン職人および同見習ひの者ら、専用宿泊所に長居致すことあらば、すべての課金、組合寄合にて相済ますべし。店ごとの支払ひの定め、製パン親方、同職人、同助手ごとに決め、金子は、入院中の貧しき製パン見習ひ、または、礼拝献金に当つるべし。

第20項 製パン見習ひ者、刑法に触るるがごとき悶着に関わりたるに於ては已れらで示談致さず・・・所属する組合寄合に訴ふべし。

第21項 すべて製パン見習ひの者、親方の下で働くべし・・・（製パン見習ひの者、曲事に関はりたる折）14日ごとの日曜日、（午前）12時と（午後）1時の間、専用宿泊所へ赴き、組合寄合の間、帽子取りて、已れ関はる組合規約に従ふべし。親方より施さるる日曜手当頂戴し、パン工房にて尊敬払ひ、再度親方の元へ赴き、親方夫婦の下にて抗はず、組合寄合より退席の折は、親方並びに同職人の許可あるまで、いづこにも出歩くこと控ゆるべし。

第22項 組合寄合にて告発（事項）あるに於ては、弁明の折も謙虚かつ神妙たるべく・・・聴衆また呼び出し受くるまで行儀よく致すべし。組合寄合開かるる間、大声張り上げ、不要の発言なす者あらば罰に処すべし。

第23項 当地の製パン親方の下にて働きたる製パン見習ひの者、い

ずれも、四季ごとに、年4回の斎日日曜日に、守護聖人アウグスティノ会教会堂に詣で、聖人ミサに列席し、各々の親方に従ひて献物なすべし。これによりて礼拝も貴きものとなり行かん。神の御力と親方の工房なくんば何人も立ち行くことあらざればなり。

第24項 パン屋、専用宿泊所、あるいは病院にて、製パン職人もしくは同見習ひの者死したる時、遺体、埋葬の決定受くまで遺棄することあるべからず、所属の若者寄合にて埋葬すべし。諸懸りにつきても記帳あるべし。但しその者の衣装にながしのほどこし為したれば、そが入用書きとどむべし。

第25項 近頃に来るも行なはるる古き慣はしにより、・・・四句節にブレッツェン焼き上げたる製パン見習ひの者ら、イースターの翌日、笛と太鼓奏して王宮まで行進したる後、そが慣はし今も廃れねば、向後（当局の今後許可する内容と隔たりあるも）、王宮まで行かんと願ふ製パン見習ひら、親方と共に参列し、従前の如く王宮をめぐりて行進あるべし。尤もそれに当りては、大声立て殴り掛くるなどの不埒蔽に慎しむべし。いづこにても畏敬心掛け、古き慣はし専一に為すべし。酒に酔ひたる者専用宿泊所に連れ帰るべし。四句節の間、口喧嘩、泣き言、いさかひあらば、組合の場で仕置あるべし。製パン親方の下にて報酬を受け取りおこと重々心し、何事も慎ましく過ごすこと旨とすべし。

第26項 争ひごと速やかに仕置なすべし。処罰されたる者、争ひの弁済果たすまで、法の下、組合寄合によりて厳に見張りあるべし。裁下聞き入れぬ者には、組合全体において、重ねて仕置あるべし。

第27項 製パン見習ひの者ら、3ヶ月毎に各々一名の製パン職人もしくは同助手選定致すべし。その者ら週二度、専用宿泊所に立ち寄り、宿主も

しくはその家族に、宿泊所での外国人にて見習ひ中の者もしくは休息中の奉公人らの立居振舞、またその者の異国での名前質し、製パン組合長に報告の後、即刻台帳に記載あるべし。専用宿泊所内にて不埒の振舞なす者、次の日曜日に組合に犯罪者として訴へ有るべし。

第28項 すべて製パン見習ひの者、・・・台帳に登録なすに際し、記載料6クロイツアー支払ひ、集金箱に収むべし。

第29項 製パン親方の下なる同見習ひの者、宿泊所もしくは病院にて死去の事あらば、(病ひ別して危険ならざれば) パン屋一軒より最低2人の若き者(軀に)同行致させ、死者土中に埋葬なすに手伝ひ尤も也。

第30項 ・・・指示受けたる製パン親方二人、当規約真摯かつ厳格に遵るべし。製パン職人及び同補助者も然り。所属のその他の製パン見習ひの者ら正しき手ほどき心掛け、金銭不屈きの事あるべからず。上記の規約により、件の製パン見習ひの者ら、他の製パン親方、同職人、同補助者たち同様、模範的に暮し、指示に従ふべし。

規約に背く者あらば、事の次第に応じ、罰金1〜20プフント科すべきこと。製パン組合にても、しばし停止もしくは組合廃絶にも及ぶこと厳に心得あるべし。

市長並びに市参事会、これら認可の規約、向後(規約の条項に)増減あらむ折りも残しおくべし。

我らの主にして救ひ主、創造主なるイエス・キリストの年、1628年8月17日、月曜日に作成されしものなり。

原本、羊皮紙に記された小冊子。389×300ミリメートル、飾り文字の装飾施したる8葉より成る。羊皮紙本の内側、皇帝の紋章前後に圧印あり

たり。大印に非されども普段の御章、紅白の絹糸垂れたるも欠失の事あり。装丁の外側インク使用の古文書館Ⅰと記さる。

史料 B：ウィーン市製パン組合規約（1629年9月7日付け）試訳

1629年9月5日 ウィーン

（神聖ローマ帝国）皇帝フェルディナント2世、以下のこと承認す。朕のためとて、ウィーン市内市民パン屋ら順次姿見せ、かの組合規約に就きて朕に忠誠示すこと有り、これによりフェルディナント（1世）、マクシミリアン（2世）、ルードルフ（2世）、マティース、即ち神聖ローマ皇帝たりし者、加へて皇帝〔フェルディナント2世自身〕の治世の間¹⁵、かの者〔市民パン屋たち〕らに・・・、また、先般同じく、朕自らにより、1622年9月9日に、固く守られんこと義務としたるに加へ、〔民の〕支持ありて、第12項、第13項、第14項を拡張し、改善に及びたる也。されば、以下の諸事、恭順あるべし。朕、改めて以下諸々の事項を掲ぐ。第15、第16、第17、第18および第19項の諸項厳に守り、詳になし、改善なすことあり。これらのこと、皇帝の御指示に従ひて文書作成致したれば、製パン組合規約またこれと同じ。

第1項 見習ひ期間勤め上げたるいずれの製パン見習ひも、等しく徒弟修業証書もち候ふこと以下の如し。見習ひの者、己れ誓約なせし親方のもとにて、（製パンの）段取り教はり、また正規の組合たらざるも（親方のもとにて）教はること肝要なり。修業証書持たざる者、製パン工程定めの間期間学ぶことなくば非ず。期間内に習得終へぬ者あらば、以後、ウィーンの地にて働くことあるも〔組合の〕支援得ぬものとす。

第2項 向後、製パン職人もしくは同見習ひの者当組合に到来あらば、

この者ら、常に、専用宿泊所供す大家及び家主に対し、あるいは奉公人に
慎み深くあるべし。宿泊所に向かひて尊大に振舞ひ、口答へ致すは以ての
外なり。これら曲事あらば、この者ら宿泊所より退去あるべし。惣じて、
製パン職人及び同見習ひの者、おのれの宿泊所の者に加へ、製パン親方
も同様に誠実たらんこと当然至極也。慎み深く控へ目の振舞ひあるべく。
とりわけ洗神、過食、女遊び、浪費、悪口、猥褻の所業など軽率なる行ひ
自制致すべし。これに逆らひたる者、初回は礼拝時に組合による監視受く
べし。全く従はぬ者あらば、家主及び（その者の）宣誓得たる製パン親方
より、市長もしくは市参事会に訴へあるべく、また係りの者によりて然る
べき体罰下されんこととす。

第3項 専用宿泊所に到来したる製パン職人もしくは同見習ひの者所持
金なき時、代金払ふべき食事たりとも、生くる糧たれば依頼受けたる家主、
別してかの者の宿泊許すべし。また、宿賃未払ひのまま到来したる製パン
職人もしくは同見習ひの者、一夜限りにてあらば翌朝厄介払ひの限りにて
許さるべし。それらに付き支払ひなさぬことあらば、当該の製パン親方組
合寄合に代納すべし。

第4項 貧富を問はず、専用宿泊所に到来せしパン屋、製パン職人もし
くは同見習ひの一人に（己れが下にて）働くこと持ちかくることあらば[[校
訂者補記] というのも、話しかけた他の誰彼もから、このパン屋は承諾を
得られなかったからだとしよう] そのパン屋の下にて働くこととなりたる
当人、即刻もしくは数日後にそのパン屋に次のことどももとむることある
可し。労働は当然に果たさるべき也。果たさることなき折、即ち宣誓
したる製パン親方とその勤勉なる仕事与えたるパン屋比べみて、（後者の
仕事が）賃金低くあらば辞めるも勝手にて、精出し働くは無用なり。

第5項 仮に、ある（前項のか？：訳者）パン屋のもとで共に働きたい

る製パン職人もしくは同見習ひ定刻に職場に出勤致さざれば、その職人もしくは見習ひの者、以下の時まで仕事禁じらる。すなわち、当該製パン職人の疲りたる・・・不利益と、この者らの宣誓なしたる製パン職人への・・・罰金の半額を比肩して同額となるまで也。

第6項 製パン職人並びに同見習ひの者、・・・製パン親方の意に背きて、・・・次のことなすべからず。・・・ゼンメル、ヴィッケン、キプフェル¹⁶、あるいは他の類するもの保管し、己れ勝手に贈答となし、また己れがためとして着服なすこと、(すべて)横領の罪に当れり。

第7項 製パン職人と同見習ひの者、・・・以下のこと課せらる。すなわち、共に働く製パン親方のもとにては、互ひに侮ることなく、今後の労働にあつては、・・・これによりて、・・・仕事にいささかも遺漏なきやうに到すべし。また過失あるときは、損失補填すべし。然るとき、組合の上役もしくは組合内部の組織によりて、・・・処罰これ可有也。

第8項 製パン職人もしくは同見習ひの者、如何な労働も忌避なかるべし。それらの仕事いづれも製パンにとりて肝要なればなり。製パン親方によりて指示さるる薪、水、穀物、粉もしくは他の同様なもの運ぶを否むことなかるべし・・・

第9項 当該の製パン職人および同見習ひの者、罰金につきては、週賃金より製パン宣誓親方の店で相殺あるべき也。・・・罰金の金銭、礼拝の献金もしくは病気の製パン職人あるいは同見習ひのために用ひらるべし。

第10項 製パン職人、また同見習ひの者、悪行いたすことなく、狼藉の悶着に別して関はりなきやう心掛くべし。(関わりある折) 事の次第に照し、己れ一人にて図らはず、市長もしくは市参事会員に必ず訴へあるべ

し。

第11項 店内で（刑罰対象になるほど）狼藉の製パン職人もしくは同見習ひの者も、宣誓先の製パン親方あるいは古参の同職人を介し、市長もしくは分別ある大人に申し立てなすべし。

第12項 如何なる製パン見習ひおよび同職人も、当地ウィーンにて、製パン親方に受け入れられなきことあるべからず。然る事あらば先に記せし如く、尊敬に値する製パン親方のもとにて、オーストリアの慣習に則り三年修行経たる者、また尊敬に値する製パン組合に雇用され、自ずと（製パン組合仲間に）加はるを得べし。また、尊敬に値する徒弟修業証書取得し、その前年の二年間及び製パン補助の仕事と、職人として一年間の仕事相済まし、都合三年に渡りて製パンに従事したる者、他所と同様、製パン職人組合の傘下に加はるべし。

第13項 挽き器用ふる製粉業者、またごく少数たらんも、上記製パン組合にて教育受けざる者ら、以下のことを禁ず。2プフントもしくは1クロイツァー（＝4プフント）にて購ひたる粉量以て、4プフント8プフントにて販売するパン焼くことある可からず。惣じて、製粉・製パン規則第16ページに記されたるに従ひ、また第3項によりて取り締まりあるべし。

第14項 我ら、また以下こと望まん。すべてのパン屋たる者、(市の)壁内・壁外を問わず、ウィーンに製パン組合本部をおきたる名誉ある組合に加入ある可し。挙行さるるあらゆる祝日、別けても復活祭後の40日間にあつては、その第二日曜日の真夜中の12時に、慣しに従ひて、店に現れ、かつまた店内に居残り、果たして神の御力か、もしくは男衆の仕業か、狼藉なすこと有る可からず。曲事あらば、組合、店に対し、2プフント、即ち12クロイツァーの課金持参し弁済なすべし。同じく、市壁内外の全てのパン屋、

その他の従来起きたる不埒の事柄に対し、より良き人たるべく向上心掛け、3プフントの課金支払ふこと義務とすべし。

第15項 ある者、組合の教育受けず、またある者行儀よき振舞ひ得ず、しばし当地に滞在せんとあらば、組合その者ら無用の者とみなす可し。その者らあらかじめ訪問販売の心積りにて他の役所の管理下なる諸々のパン屋の邪魔をし、また異なる場所にて換金なすことあらば、パン屋被害被ることと相成れば、向後、いかなる者もパン屋の代行たること許さず、いずれの領主の裁判権の下でも阻止されるべし。1マイルの距離内に他のパン屋無きとき、その地に赴く者にて尊敬されるべき出生証明書と徒弟就業証明書持参ある者たれば、一人の製パン親方に己れの到着届け出、その後、市壁外の製パン親方に受け入れらるること尤もなり。

第16項 惣じて、地方のパン屋ら、市内にありては王宮にてパンを焼く他無ければ、慣はしに従ふべし。また普段の週市にて、市民パン屋、粉屋・農夫らと同じからざれば、向後、年長者による時間の監視受く限りにては（市場販売の）資格与へらる可し。

第17項 我ら、以下のこと欲せんとす。いかなる訪問販売パン屋も市内にての商ひある可からず。ただし、市民の家もしくは郊外の家屋にありて、焼き上げるパンの包み携へて滞在致す限りにては勝手たるべし。

第18項 パン屋某に滞在せし外来の者ら、市内外各所において（パンを）並べて売ることあらば、我ら以下の如く判定せん。パン屋某に逗留したる市民権持ちたるパン屋（＝市民パン屋）あまたのパン焼くを引き受けたる時、市民パン屋と同様の（市民権を持ちたる）者らに限りて、パン自由に焼き、商ひ広げるを得べし。されど訪問販売パン屋もしくは遍歴中の者らのこれらをなすに於ては、捕縛され、（宿泊させた）パン屋のパン没収さるべき也。

かく取り上げたるパン、・・・市民病院にて、貧しき人々に配給あるべき也。

第19項 エンス川下流オーストリア大公領の市あるいは町にて総ての勝手販売のパン屋、埒もなき組合規則我意に仕立て（規約に）逆らひて滞在し、年長者らにより広く守られたる礼拝軽んじ、古来「聖母マリア」の名によりて為されし善行友誼蔑むことあらば、自今以後ウィーン製パン組合本部の監督の下に置き、改めて質す事とす。

本状、証拠たるべく御璽得て遺漏なきを期し、ウィーン市において与へられたるなり。主であられ、慈悲深きキリストの年（神聖ローマ帝国治世11年、ハンガリー王国治世12年、ボヘミア王国治世13年の）1629年の9月5日。

威厳ある慈悲深いカエサル（皇帝）の勅令において

署名：フェルディナント（自筆）； ヨハン・バプティスト・フライアー・フォン・ヴェルデンベルク（自筆）；トビーアス・ゲルティンガー（自筆）；書記官 リーベンベルク（自筆）

原本：羊皮紙の小冊子、8葉で、表紙・背表紙あり。315mm×277mmで、赤いビロードのリボンが掛けてあり、皇帝の自筆署名入り。金モールの紐のそばにある告知された御璽は欠損。表紙にはモダンな銘文を付けた徽章が貼り付けられている。皇帝フェルディナント2世により、組合規則の改善が1629年9月5日に下賜せられた。2本の赤鉛筆跡、外表紙にインクで古文書館Ⅱとある。

注

- 1 (Störrer / Störer) の和訳については今回大いに悩んだ。わが国の独和辞典にあつては、唯一、富山芳正『郁文堂 独和辞典 第二版』に、(Störer) の意味として、「(仕事場を持たず) 得意先に出向いて仕事をする職人」とある。富山芳正、上掲書、1423頁。この場合、パンの焼成までには時間が掛かること、もちろん得意先でパン焼も可能であろうが、やはり、史料Bの第17項にあるように、「すでに焼き上げたパンを持参して」(mit pachung deß brotts sich aufhalten, …)、個別に販売するのが、当該パン屋としてもベストの商いであると筆者は思い、「訪問販売パン屋」とした。「訪問販売」という語は谷口健治からの借用である。谷口健治「帝国ニュルンベルクにおけるパン供給と製パン手工業」(『西洋史学 171号』所収)、1993年、5頁。/ なお、ウィーンでは、すでに1527年から (Störrer / Störer) についての言及がある。Ignaz Rothenberg, Zur Reorganisation des Wiener Zunftwesens um das Jahr 1600, in: Jahresbericht über das K. K. Staats-Realgymnasium im XXI. Gemeindebezirke in Wien, Wien, 1909, S. 5.
- 2 高橋清徳「中世におけるパン製造業の法的諸相 (1) 一中世バリ慣習法の研究一」(『千葉大学 法学論集』第6巻 第1号 所収)、千葉大学法学会、1991年、75頁。
- 3 G. A. Ressel, Das Archiv der Bäckergenossenschaft in Wien, Wien, 1913, S. 14～18.
- 4 G. A. Ressel, a. a. O., S. 18～23.
- 5 ダーニエール・モーザーは、1610～13年、1616～22年、1626～37年の都合三回、ウィーン市長を歴任している。Felix Czeike, Wiener Bürgermeister, Wien-München, 1975, S. 134. / 興味深いのは、クレーズルがウィーンへ凱旋した1618年2月18日(1616年の枢機卿就任に因る)と1628年1月25日(ウィーン追放後初めてのウィーン帰還に因る)との2回ともモーザーの市長在任時であり、ウィーン市総出の歓迎セレモニー実施ということで、モーザー自身のクレーズルに対する入れ込み様がここから窺われる。なお、モーザーは、クレーズル不在の期間、皇帝フェルディナント2世と結んで、ウィーンの対抗宗教改革(カトリック宗教改革)を推し進めた人物である。Peter Csendes und Ferdinand Opll, Wien Band 2., Wien – Köln – Weimar, 2003, S. 24. / ウィーンでの完全なカトリック化というと、1652年1月4日の宗教勅令にまで伸びるが、貴族層に対しては寛容で、17世紀前半、下オーストリアでは、約30の騎士階級と43の領主身分がプロテスタントに留まっていた。Peter Csendes und Ferdinand Opll, a. a. O., S. 332.
- 6 本稿史料B参照。(… daß er inen dieselbe nochmallen mit einruckung deß fünffzehenten, sechzehenden, siebenzehenden, achtzehenden und neünzehenden puncten zu confirmiern, …) G. A. Ressel, a. a. O., S. 18.
- 7 ウィーンの製パン業は、その作られる製品の種類によって、次の三つのグループに分別された。大型のパンを作る黒パン屋、小型のパンを焼く白パン屋、そして、高級な贅沢パンを製造する高級パン屋であった。G. A. Ressel, a. a. O., S. VII.
- 8 (Item ir fstl. g : herrn Glöbl wegen der neuen convermaczion halber, daß er sich gegen einen

ersamben handwerch erpotten, dieselbige einen löblichen handwerch zur gedechtnuß zu verpassern unnd auf daß ehist von Ihr Mt. zu verfertigen, wie eß dan beschehen, auf zway unnderschiedlich mallen aires brodt unnd wecken pachen und verehrt … 2 fl. 6 §) G. A. Ressel, a. a. O., S. LVII.

- 9 フェルディナント側からの罪状では、フェルディナントの皇帝就任手続きにクレーズルが時間稼ぎをしたというものであった。しかし、大局的に見て、当時すでに勃発していた隣国ボヘミアでの（第二次）プラハ窓外投擲事件（1618年5月23日）に端を発した内乱で、蜂起したプロテスタント系のボヘミア貴族との和睦をクレーズルは目指していたというのが、クレーズル逮捕の真相だと思われる。
- 10 (weilen dann die täglich erfahrung mit ich bringt, as vergleichen machende neuerungen lauter unordnungen abgeben.) Wiener Bäcker=Innung (herg.), 700 Jahre Wiener Bäcker=Innung, Wien, 1927, S. 14.
- 11 この請願書は日付けが記入されていないが、文面上に赤鉛筆で、1629年のメモ書きがある。G. A. Ressel, a. a. O., S. LV.
- 12 G. A. Ressel, a. a. O., S. LVI.
- 13 (Item alß wier die fünff neue articl wegen der sterer zu unßerer handwercks ordnung bey dem herrn cardinalen Glößl haben angebracht, damit dieselben auch dorzue confirmirt wurden, einen weckhen verehrt, per … 1 fl. 4 §) (Item auch damalen ihme herrn cardinalen unnd annderer ortenn aires brodt verehrt … 3 fl. 4 §) G. A. Ressel, a. a. O., S. LVII. / こうした、金額に見合う贅沢パンを贈る行為は、ウィーンでは、17世紀中葉まで続いた。Helmut Schlegel, Aus der Geschichte des Bäckergewerbes in Wien, Wien, 1964, S. 94.
- 14 「ある高位名声の持ち主であられるパトロンの支援がなければ、おそらく成果は上がらなかったであろう。彼（クレーズル）の王侯貴族風のご慈悲にお頼みする以外には術はなく、そうしなければ、製パン親方とその後継者である組合仲間にとっては未解決のままであり、彼（クレーズル）は最高の慈悲をお示しになって、ローマ帝国皇帝陛下の名高いこの近臣閣下によって、彼の確約せし規約は、(陛下)のもとに確実に届けられしものなり。」(ohne zuethueng aines hochansehnlichen patroni nicht wohl zu werk richten khönnen, aber außer Seine hochfürstliche gnaben anrufen und bitten, Sy geruhen ihnen und ihren nach-kommenden handwerksgenossen nachmallen diese größte gnad zuerzaigen und bei Ihrer röm. khay. May. Mit dero hochansehnlichen intercession ihnen die obsignierte artikl zu confirmation zuebringen.) Wiener Bäcker=Innung (herg.), a. a. O., S. 14.
- 15 マクシミリアン2世、ルードルフ2世、マティーアス、そして、フェルディナント2世の4名は、いずれもクレーズルゆかりの皇帝であった。こうしたところにも、フェルディナント2世の、クレーズルに対する配慮が窺われる。
- 16 ここにも、すでにキプフェルン（キプフェル）の語があることに、筆者は注目している。